

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02728

研究課題名（和文）教師の授業力量の熟達化過程の解明と効果・効率的研修プログラムの開発

研究課題名（英文）an analysis on expertise process of teachers teaching ability

研究代表者

石上 靖芳（Ishigami, Yasuyoshi）

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：50402227

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、小学校教師を対象に、授業力量の下位力量である「単元開発力」「授業展開力」「授業評価力」「単元再構成力」の4つの具体的力量が授業実践と同僚との協同省察の往還により、学習が深化し、実践化が促進され、授業力量の熟達化が図られていくのかを検討することであった。その結果、複数の若手教員を対象に年間を通しての分析を行い、「教科に関する内容」「生徒への対応」「授業の展開」において向上が見られた。とくに「教科に関する内容」における教材の準備や「授業の展開」における見通しに関して著しい向上が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまであまり着目されてこなかった小学校学年部授業研究を対象に、実際の授業実践を対象に中・長期的な展望のもとアクションリサーチに取り組みデータ収集して分析を行ったこと。また単元開発過程においては、新学習指導要領の趣旨の実現を目指した資質能力の育成の視点を目指したアクティブラーニングの展開とそれを評価するためのパフォーマンス課題設定とパフォーマンス評価を位置付けて単元開発を行っていることから今日的課題に対応して意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to analyze for elementary school teachers to expertise teaching ability four of "creation units", "class planning skills", "class evaluation", "composing learning units" by cooperative reflection. As a result, it was to analyze for young elementary school teachers throughout the year and improvement was seen about "subject contents", "correspondence to a student", "class planning skills". Particularly, remarkable improvement was seen about preparations for teaching materials in "subject contents" and prospect in "class planning skills".

研究分野：教師教育

キーワード：熟達化 協同省察 アクションリサーチ 授業力量形成

1. 研究開始当初の背景

これまでの教師の授業力量形成に関する研究においては、藤岡ら(2010)に見られるように語りの分析を通して実践知の形成過程を明らかにするライフヒストリー研究や、秋田(2006)、坂本(2012)のように校内授業研究事後検討会における談話分析による協同省察の効果を明らかにしようとする研究に見られ進展してきている。しかし、教育現場の実践を対象に、長期の期間を設定して実証的に検討された研究の蓄積は希少である。これまでに、このように研究が進展するなか、教師の単元を開発する実践的知識や授業力量の熟達に関心を抱き、実証的な研究に取り組んできた。

そこで、授業力量の具体的内実や外部要因が熟達化に与える影響を明らかにするため、小中学校の教師を対象に調査研究を行い、授業力量は「単元開発力」「授業展開力」「授業評価力」「単元再構成力」の4つの下位力量に、影響を与える外部要因は、「自主自発的研修」「同僚との研修」「組織風土」「校外研修」の4つの要因を明らかにし、その関係を検討し、若手、中堅、ベテラン教師では、授業力量の熟達化に影響を与える要因の認識に相違があることを明らかにした(石上 2015,2016)。また、小学校において単元レベルの学年部授業研究を対象に、アクションリサーチ(以降 A R)を実施し、若手教師が、同僚教師との協議から省察を通して実践化を図り、授業方略の認知的側面、授業技術の側面から授業力量の熟達化過程を実証的に明らかにしてきた(小笠原・石上・村山 2014)。

2. 研究の目的

これまでの研究をうけ、本研究では、第一に小学校における若手、中堅、ベテラン教師を対象に、授業力量の下位力量である「単元開発力」「授業展開力」「授業評価力」「単元再構成力」の4つの具体的力量が授業実践と同僚との協同省察の往還により、どのように学習が深化し、実践化が促進され、授業力量の熟達化が図られていくのか、その特徴を明かにし、生涯を通しての授業力量の熟達化過程のメカニズムを明らかにすることであった。第二に明らかにした授業力量の熟達化のメカニズムを適用・応用し、若手、中堅、ベテランの各年齢層に応じた効果・効率的な研修プログラムを開発することであった。これらの一連の研究を推進し、研究成果を提供できれば、校内授業研究や県・市教育センターなどで実施される各年齢層に応じた授業力量向上研修の充実化と活性化を期待できる。

3. 研究の方法

(1) 小学校学年部授業研究(協同的な単元開発)を対象に長期的なA Rの実施

学年部授業研究は、若手、中堅、ベテラン教師で構成され、同じテーマのもと単元開発・同一授業案での授業実践・協同省察から実践を改善していくため、1つのA Rのフィールドから、協同省察の内容、学習したことの深化や実践化に関する発言データなどを容易に収集しやすいという利点がある。年間を通して複数の単元開発に関するA Rによるデータの収集から授業力量の熟達化過程の特徴とそのメカニズムを検討する。

(2) 新学習指導要領の趣旨を実現する単元開発・実践・評価の設定

学年部による単元開発の具体的内容は、新学習指導要領の改訂の趣旨である資質能力を育成する視点を設定し、アクティブラーニングの展開とそれを評価するためのパフォーマンス課題の設定とパフォーマンス評価を位置付けて、単元開発・実践・評価に取り組む。

学術的独自性と創造性として、これまでに着目されてこなかった小学校学年部授業研究の単元開発過程を対象に、長期的な期間を設定して協同でA Rに取り組み、若手・中堅・ベテラン教師の授業力量の熟達化過程の内実を具体的に明らかにしようとする点にある。また、単元開発過程においては、新学習指導要領の趣旨の実現を目指した資質能力の育成を目指したアクティブラーニングの展開とそれを評価するためのパフォーマンス課題の設定とパフォーマンス評価を位置付けて単元開発に取り組むため、その理念の定着過程にまで踏み込み、今日的課題に対応した授業力量の熟達化過程を明らかにすることが可能となる。

4. 研究成果

本研究の目的は、小学校教師を対象に、授業力量の下位力量である「単元開発力」「授業展開力」「授業評価力」「単元再構成力」の4つの具体的力量が協同省察により熟達化が図られていくことを検討することである。

例えば、小学校Kベテラン教師の国語科文学教材の単元開発を対象に、3回にわたって実施された事前検討会での協議内容を文字化し、定性的コーディングにより、指導方略を抽出するとともに開発過程における熟達化を検討した。その結果、指導方略に関する29の概念が抽出され、実践経験に基づく教材化方略、単元開発の具体化方略、授業展開場面における具体化方略の3つのカテゴリーに整理されるとともに、<作品読み取りの視点>、<教材に内在する価値>、<授業改善へ向けての挑戦課題>、<単元目標の設定>、<朗読への対応方略>、<開発の具体的方略>、<授業の質を深める具体的方略>、<授業構成と展開の方略>、<子どもの

学習状況の想定>の9つのサブカテゴリーに整理され、ベテラン教師の熟達化された実践的知識の内実が具体的に明らかになった。

実践経験に基づく教材化方略では、【1. 叙述に即しての読み取り】、【2. 読み取りの多様性の保証】、【3. 主人公の読み取りに焦点化】、【4. 発達段階に応じた読み取りの方法】、【5. 生き物への畏敬の念】、【6. 主人公の劇的な心情の変化】、【7. 行動描写中心の鋭い文章構成と展開】、【8. 配当時間の短縮化】、【9. 単元を貫く課題としての朗読の設定】、【10. 学んだことで子ども自身に成長を実感させる】、【11. 学んだことが生かせる活用場面の設定】の概念が抽出された。これまで以上に学習指導要領の趣旨に則ること、国語科における国の動向を踏まえた単元を貫く言語活動やクライマックスを中心に読解を行うという授業に関する新しい方法論を取り入れることで、自身の授業を改善して再構築したいという強い動機が単元開発の原動力の基盤となっているという熟達化された実践知が明かとなった。

また、単元開発の具体化方略においては、【12. 学習指導要領で示された内容との整合性の確認】、【13. 単元における達成目標の設定】、【14. 音読と朗読の相違の明確化】、【15. 単元への朗読の位置付け方】、【16. 朗読の評価方法】、【17. 単元における課題設定】、【18. 単元構成と具体的展開】、【19. 単元での学習の見通し】、【20. 読み取り方の習得の方法】の概念が抽出された。単元開発の第1次では、朗読を高めるための学習活動の見通しをもたせる、第2次では、朗読を高めるために本文の解釈を深める、第3次では、各自が朗読をタブレットPCで録音したものを紹介し合う時間を設定するというように、単元構成と具体的展開を機能的・効果的に展開できるよう構想し、単元の枠組みを決定し具体化を図っているという熟達化された実践知が明かとなった。

さらに、授業展開場面における具体化方略においては、【21. 読み取りを深めるための工夫】、【22. 主人公に関する叙述の解釈】、【23. 文章表現の機能的分類の方法】、【24. 解釈の多様性を引き出す課題の設定】、【25. 学習効果を促進させる授業展開】、【26. 話し合いの場の設定】、【27. 読み取り方を理解するための板書の工夫】、【28. 課題に対して想定される子どもの学習状況】、【29. 学習の高まりへの期待】の概念が抽出された。

以上の過程を経てベテラン教師は、さらに自身の授業を改善し高めていこうとする強い動機を基盤として、単元・授業づくりに関する指導方略を駆使して国語科文学教材の単元開発を行うという熟達化が諮られていることが明かとなった。

本研究の単元開発過程を要約するならば、まず、これまでの実践経験に基づく教材化の方略や強い授業改善への動機を有すること、次に改善課題を明確化し、その課題を解決することを軸に単元の大枠や内容が指導方略をもとに構想されること、そして実際の授業実践を前提に質や効果を高めるために授業の展開や内容が指導方略をもとに構想されていて質の高い熟達化が諮られていることである。

今回示したベテラン教諭のように強い動機を持ち、授業改善が志向され単元開発が行われていたことは、ベテラン教諭自身の授業スタイルの変容はもちろんのこと、教師の実践的知識である指導方略が新たに獲得され、熟達化が諮られたことを示唆しているものである。これは、ベテラン教師の熟達化過程として捉えることができ、その指導方略の獲得過程を具体的な事例として構造的に示せたことは、本研究の成果である。

参考・引用文献

- ・秋田喜代美(2006)「教師の力量形成 - 協働的な知識構築と 同僚性形成の場としての授業研究 - 」、『日本の教育と 基礎学力』, 21 世紀 COE プログラム東京大学大学院 教育学研究科基礎学力研究開発センター, 明石書 店, pp. 191-208
- ・藤原顕・遠藤瑛子・松崎 正治(2006)『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』, 溪水社
- ・石上靖芳(2015)「国語科教師の授業力量形成に影響を及ぼす研修要因 : 中学校教師への意識調査(質問紙調査)の数量的分析」, 日本教科教育学会誌 (日本教科教育学会), 38(1), pp. 25-35
- ・石上靖芳(2016)「学校教師の授業力量の形成に影響を及ぼす研修機会-国語科を対象とした質問紙調査の数量的分析-」, 教科開発学論集, 4 巻, 4, pp. 13-22
- ・石上靖芳(2019)「ベテラン教師の単元開発において活用される指導方略と単元開発過程の解明 - 小学校国語科文学教材の授業実践を対象に - 」, 日本教科教育学会誌, 第 42 巻 3 号 (日本教科教育学会), pp. 1-13
- ・小笠原忠幸・石上靖芳・村山功(2014)「同僚教師との協働省察の繰り返しが若手教師の授業力量向上に果たす効果 - 小学校学年部研修に焦点をあてて - 」教師学研究 (日本教師学学会), 14 巻, pp. 13-22
- ・坂本篤史(2012)「小学校教師の国語科授業における実践的知識の分野間相違 : ある熟練教師による説明文授業と物語文授業の語りの比較から」教師学研究 (日本教師学学会), 11 巻, pp. 35-46
- ・田村響太郎・石上靖芳(2022)「中学校の理科教師の資質・能力の向上 - 初任者研修を通して - 」, 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), 第 73 号, pp. 148 -156
- ・田方峰樹・石上靖芳(2022)「中堅教諭の社会科指導における困り感の抽出 - X 教諭を事例として-」, 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇) 第 73 号, pp. 135 -147

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大橋貴成、石上靖芳	4. 巻 53
2. 論文標題 小学校理科における問題解決学習をうながす単元開発とその実践 - 物質・エネルギーに着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028493	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原和弘、石上靖芳	4. 巻 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）
2. 論文標題 問題解決能力の向上を実現する単元開発と効果の検証 - 小学校3年算数科「ぼうグラフ」の実践から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 90-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028494	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村響太郎、石上靖芳	4. 巻 第52号
2. 論文標題 中学校理科における恐竜の復元を単元とした評価の検討：テキストマイニングソフトウェアを用いた知識の構造化の分析を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 56 - 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 那須健治、石上靖芳	4. 巻 第52号
2. 論文標題 プログラミング教育における論理的思考力の育成方法の検討：中学校技術科の情報教育を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 71 - 82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村響太郎、石上靖芳	4. 巻 第71号
2. 論文標題 総合的な学習の時間における評価方法の検討：テキストマイニングソフトウェアを用いて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）	6. 最初と最後の頁 183-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原和弘、石上靖芳	4. 巻 第31号
2. 論文標題 算数科における問題解決能力の育成を実現する単元開発とその評価：「データの活用」領域の実践から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 239-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大杉鏡康、石上靖芳	4. 巻 第31号
2. 論文標題 中学校社会科における歴史的思考力の育成に関する検討：江戸時代の幕政改革に歴史的な見方・考え方を働かせる単元開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 229-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石上靖芳	4. 巻 42 - 3
2. 論文標題 ベテラン教師の単元開発において活用される指導方略と単元開発過程の解明 - 小学校国語科文学教材の授業実践を対象に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村響太郎、石上靖芳	4. 巻 51
2. 論文標題 思考スキルを用いた科学的思考力育成の育成に関する研究 「恐竜の復元」を対象とした単元開発とその評価を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 111 - 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村響太郎、石上靖芳	4. 巻 70
2. 論文標題 総合的な学習の時間における思考スキル活用に関する効果の検討 - 課題解決学習における思考の働きが知識に与える影響の分析を通して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）	6. 最初と最後の頁 103 - 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山路 崇仁、石上靖芳	4. 巻 51
2. 論文標題 小学校社会科歴史分野における時代の構造的理解を促進する単元開発と効果の検証：パフォーマンス課題の設定とその評価の質的分析を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 127-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大橋貴成、石上靖芳
2. 発表標題 小学校理科における問題解決学習をうながす単元開発とその実践 - 物質・エネルギーに着目して -
3. 学会等名 日本教育実践学会第24回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大杉鏡康、石上靖芳
2. 発表標題 中学校社会科における歴史的思考力の育成に関する研究 - 歴史的な見方・考え方を働かせる単元開発と評価
3. 学会等名 日本教育実践学会第23回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 那須健治、石上靖芳
2. 発表標題 中学校技術科における技術ガバナンスの育成 - 計測・制御の技術の効果とリスクを多面的に考える「評価」に焦点をあてて -
3. 学会等名 日本教育実践学会第23回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柳原和弘、石上靖芳
2. 発表標題 算数科における問題解決能力の育成を実現する単元開発と実践 - 算数科「データの活用」領域に焦点をあてて -
3. 学会等名 日本教育実践学会第23回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山路崇仁、石上靖芳
2. 発表標題 小学校社会科歴史分野における時代の構造的理解を促進する単元開発と効果の検証 - パフォーマンス課題の設定とその評価の質的分析を通して -
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村響太郎、石上靖芳
2. 発表標題 総合的な学習の時間における思考スキル活用に関する効果の検討 - 課題解決学習における思考の働きが知識に与える影響 -
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村響太郎、石上靖芳
2. 発表標題 中学校理科において思考スキルを用いた科学的思考力育成の検討 - 「恐竜の復元」を対象とした単元開発とその評価から -
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------